



# 仏はどこにいますか

真宗が説くところの阿弥陀仏とは、いったいどこにいますか。そう尋ねられたら、あなたはどう答えますか。

こういう問いかけて、いままでは二種の答えが教えられてきました。そのひとつは、阿弥陀仏とは私の生命の中に宿っていてくださるという考え方と、もうひとつは、阿弥陀仏はいつも私の側にいてくださるという考え方です。前者は、まったく主体的に、私と仏とを一元的に捉える立場に立つ発想で、内在的な理解といふことができます。そして後者は、まったく対照的に、私と仏とを二次元的に捉える立場に立つ発想で、外在的な理解といえましょう。

そこで親鸞さまの教示によりますと、

「この如来、微塵世界にみちみちたまへり。すなわち、一切群生海の心なり。」『唯信鈔文意』と明かされます。主客一元的、内在的な理解です。阿弥陀仏は、あらゆる世界にみちみちて、私の生命の中にまで来ていてくださるというわけです。

しかしながら、蓮如さまの教示によりますと、それは違つて、この阿弥陀如来の御袖にひしとすがりまいるせよ。』『御文章』

と語られます。それは主客一元的、外在的な理解です。阿弥陀仏とは、私の祖と成る存在だというわけです。

したがつて、私たちが阿弥陀仏に出遇う、それを信じるといふことは、親鸞さまの教えによるならば、その日々に念佛をもうしつづけるなどそのまゝ、阿弥陀仏の私への呼び声であると聞きながら、その私の生命の中の仏に、深く「めざめ」していくことをいいます。しかもまた、そういう「めざめ体験」とは、私の生命にめざめる「」の中でも生まれてくるところ、そこではつ



(信楽峻磨遺稿法語集より引用)

さに「めざめ」ることと、ひとつになつて成りたつてくるものです。そのことは、親の恩が知れども私の側にいてくださるという考え方です。前

者は、まったく主体的に、私と仏とを一元的に捉える立場に立つ発想で、内在的な理解といふことができます。そして後者は、まったく対照的に、私と仏とを二次元的に捉える立場に立つ発想で、外在的な理解といえましょう。

そこで親鸞さまの教示によりますと、「この如来、微塵世界にみちみちたまへり。すなわち、一切群生海の心なり。」『唯信鈔文意』と明かされます。主客一元的、内在的な理解です。阿弥陀仏は、あらゆる世界にみちみちて、私の生命の中にまで来ていてくださるというわけです。

しかししながら、蓮如の教えによると、仏に出遇うためには、ただいちばん私の外なる仏、その大悲に向かつて「たのみ」、それに「まかす」とことだといわれます。このように「たのむ」とか「まかす」ということは、こちらから相手に向かって、一方的に依頼するだけであつて、それには違つて、この阿弥陀如来の御袖にひしとすがりまいることはなく、また人格成長といふことも成ります。現在も未来も、すべて生きとし生けるものはみな同じでなく、それぞれが光を放つのであるといわれているのです。ここでは『阿弥陀経』の、

青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光

の四句の中、上下の二句を選んでいます。極楽浄土の池の中には、車輪のような大きな蓮華があり、青い華は青い光を、黄色い華は黄色い光を、赤い華は赤い光を、白い華は白い光を放ち、いずれも美しく、その香りは氣高く清らかです。「一切衆生悉有仏性」「草木国土悉皆成仏」人間のみならず、生きとし生けるものに共通するのは、仏性があり仏になることができることの意味です。そのうえで、それぞれの個性が發揮されるのです。(「月々のこころ」より)

法語カレンダー一月

人も草木も虫も 同じものは一つもない

おなじでなくて みな光る

今月の言葉は、榎本栄一さんの著「念佛のうた光明土」(樹心社)に見られる言葉です。原文は、

このようになつています。

一天上天下唯我独尊

人も 草木も 虫も

同じものは一つもうまれない

いまうまれたもの

これからうまれるもの

これらんください

同じやなくて みな光る

白色白光 青色青光

「十人十色」という言葉があります。人は、考

え・好み・性質などがそれぞれ違うことを意味

します。この法語では、さらに入だけでなく、

草も木も虫も、すなわち植物や昆虫、さらに動

物にまで広げ、同じものはうまれないとわれ

ます。現在も未来も、すべて生きとし生けるも

のはみな同じでなく、それぞれが光を放つので

あります。ここでは『阿弥陀

経』の、

第三位 坊守 実母を見送る

「迷惑をかけたくない」が口癖の母らしい最

期でした。家族や親せき、地域の方、勝林寺ご

門徒のお支えによつて、母が望んでいた「見送

り」をすることができました。深く感謝します。

第二位 住職 県自治会賞をいただく

内町区の区長として一〇年間務めさせていた

だいたことを認めていただき、立派な賞をいた

だきました。この賞に恥じぬよう、今後も地域

のために尽くしてまいります。

どすん

く感じ、歳を重ねるのも悪くはない  
なあと思えます。さて、一〇一九  
勝林寺六大ニュースの発表です。

第六位 入海「西池先生」になる

六月の一週間、母校出石高校で教育実習を行いました。良い先生方と生徒さんに支えられて、とても充実した日々を過ごしました。母を見ていて、間違いなく、彼の人生で最もよく勉強した一週間でした。

第五位 希里 運転免許を取る

なかなか取れなかつた免許がようやく取れました。母に似て、ややガサツですから、運転には向かないのではと案じましたが、若院曰く「一番センスがいい」らしい。早速、神戸でレンタカーを乗り回しています。

第四位 若院 出石に帰る

一二年間の京都暮らしに終止符を打ち、四月から勝林寺に戻り、豊岡市社協にお世話になります。職場の皆さんによくしていただき仕事にも慣れてきたようで、週末は趣味の山歩きにいそしんでいます。

第三位 坊守 実母を見送る

「迷惑をかけたくない」が口癖の母らしい最

期でした。家族や親せき、地域の方、勝林寺ご

門徒のお支えによつて、母が望んでいた「見送

り」をすることができました。深く感謝します。

第一位 本堂 裏面工事完成

土壁をトタンで覆つていた本堂の裏面を、杉板張りに修復していただきました。犬走りの部

分にはコンクリートを打ち、車いすでも通れる

通路になりました。ぜひ、見てください。